

# 蔵王高原殺人事件

さおとろけんきつじんじけん

梓林太郎



徳間文庫

徳 間 文 庫



ざ おう こうげん さつじん し けん  
蔵王高原殺人事件

© Rintarô Azusa 2006

2006年4月15日 初刷

著 者  
梓 林 太 郎  
あすさ りん た ろう

発行者  
松 下 武 義  
まつ した たけ よし

東京都港区芝大門二丁目105-8055

発行所  
株式会社 徳間書店

電話  
編集部 〇三(五四〇三)四三五〇  
販売部 〇三(五四〇三)四三二四

振替  
〇〇一四〇一〇一四四三九二

印刷  
株式会社 廣濟堂  
株式会社 明泉堂

〔編集担当 齋藤陸美〕

ISBN4-19-892403-1 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

江苏工业学院图书馆

藏书章  
藏 高原 殺人 章 件

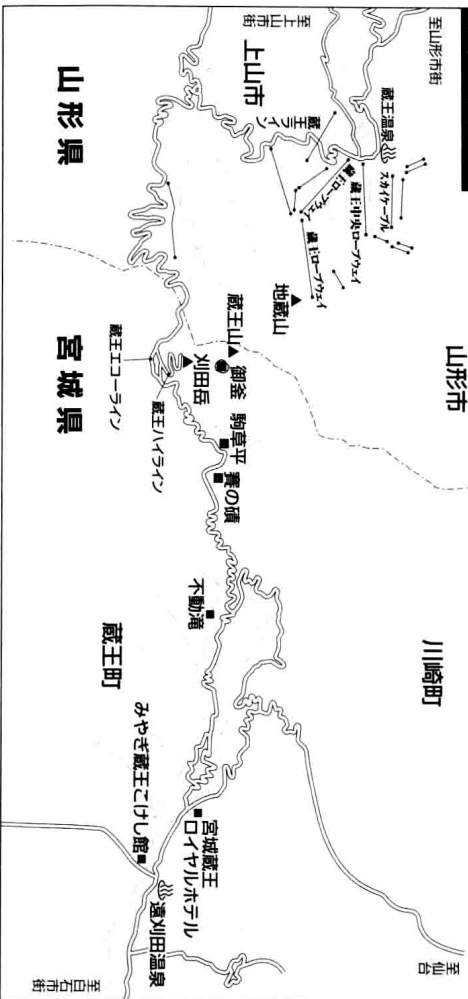
梓 林 太 郎



德 間 書 店



# 蔵王周辺





1

十月四日の新聞は紅葉の写真を飾っていた。

「長野県の北アルプス<sup>からさわ</sup>涸沢で紅葉が見ごろを迎えた。標高約二、三〇〇メートルの涸沢カールは、ナナカマドの赤色やダケカンバの黄色で山肌が染まり、きのう三日も、登山や写真撮影を楽しむ人たちでにぎわった。山小屋によると、今年は気温の高い日がつづいたため、例年に比べ一週間ほど遅れた。九月中旬の寒波で、色づきが濃くなりはじめた。今週いっぱい楽しめるという。

先月二十八日に穂<sup>ほたか</sup>高連峰山頂で初冠雪が観察され、三日朝は涸沢で一・三度と冷え込み

も厳しくなり、紅葉前線もふもとに向かっている」

長野県警豊科署とよしなの刑事道原伝吉は、きよう非番だった。

ある事件の捜査が二週間つづき、その間、五日間は帰宅できなかつた。一昨日、その事件が解決し、打ち上げがあつた。昨日は一日がかりで捜査資料を整理し、久しぶりに定時に家に帰ることができた。風呂ふろから上がって日本酒を三合ばかり飲み、ぐっすり眠つた。だが、眠けが残っていて、朝食のあと、二時間ほど眠つた。

彼は生来不器用な質たちだ。休みの日はやることがない。だから連休は退屈である。

彼は縁側にあぐらをかいて、せまい庭に咲くキクの花を眺めていた。

飼ひ犬のロクが彼を見て、ときどき前足を上げる。散歩をせがんでいるらしい。

彼は犬小屋を修理することを思いついた。何日か前、娘の比呂子ひろこに、雨洩りあまもするといわれていたのである。

物置きから、厚さ一センチほどの板を出し、それを四〇センチの長さに切つた。大工道具は一通りそろつている。切つた板に鉋かんをかけたところへ、比呂子が学校から帰つてきた。彼女は高三で、来年は松本市にある大学を受験することになっている。

ロクの世話は比呂子の役目である。犬を飼うことについては、母親の康代やすよに反対された。以前飼っていた犬が、交通事故で死んだことがあった。そのときは母娘ははなして泣いた。もう二度と犬も猫も飼わない、と康代はいったものである。

その二か月ぐらいあと、比呂子の同級生の飼いだ犬が仔こを三匹産んだ。見にくるようにと比呂子に電話があった。仔犬を見にいった比呂子は、そのとき友だちに、一匹ももらうことを約束したらしい。彼女は何度も康代に手を合わせ、拝み倒して仔犬を飼う許可を取りつた。康代が呈示した条件は、犬の世話の一切を自分ですること、毎朝、毎夕、散歩させること、無駄鳴きをさせないようにしつけることだった。

比呂子は誓約書を康代に差し出し、まともに歩けるようになった仔犬を抱いてきた。鼻筋だけが黒い柴犬しばけんの雑種だった。

犬の名は家族三人で考えた――

比呂子は、道原が犬小屋の修理をしているのを見てよろこんだ。

「こういうことは、お父さんでなきゃダメよね」

彼女は二階の自分の部屋に鞆かばんを置くと、ロクを散歩に連れ出した。

三十分ばかりで帰ってきたが、彼女はなんと、瘦やせて汚れた茶色の大型犬を連れてきた。

ロクは尾を下げ、道原に助けを求めようなしぐさをした。

「その犬は、なんだ？」

道原は金錠かなづちを持って立ち上がった。

「わたしたちのあとを尾ついてきたの」

「どこから？」

「お宮の前から」

「どこかの家で飼われていたんだろ？」

「そうだと思うけど……」

それにしては全身があまりにも汚れている。痩せかたもひどい。首輪をしていないが、ゴールデンレトリバーの雌の成犬である。痩せているせい、顔がやけに大きく見える。

「お母さんが見たら、怒るぞ」

康代は買い物に出かけている。

「そうだけど、いくら追っても尾ついてくるんだもの」

「ヘンだな、その犬。もしかしたら捨てられたんじゃないのか？」

「そうかしら」

「首輪がないじゃないか」

「どうしたらいい？」

「その犬を見つけたお宮の前へ連れて行くんだな。お宮の近くの家で飼われていたんなら、自分の家へ帰るような気がするが」

比呂子は、道原も一緒に行ってくれないかという。

道原は、金鎚を犬小屋の屋根に置いた。

比呂子がロクの綱を引いた。が、茶色の珍客は腰を上げようとしなかった。

比呂子は、ボウルに水を汲んで、ロクと珍客に与えた。大型犬は音をさせて水を飲んだ。「お腹がすいてるみたい」

彼女はドッグフードを皿に盛った。珍客はガツガツとそれを食べた。

康代が帰ってこないうちに珍客を連れ出そうとしたが、彼女は前足を伸ばして腹這いになった。動くのがいやだといっているようである。

道原は珍客を車に押し込んだ。比呂子は助手席に乗った。神社までは五分とかからない。そこで珍客を降ろしたのだが、彼女は比呂子の横にびたりとくっついて動かなかった。

「あんたのおうち、どこなの？」

比呂子はきいたが、犬は尾をゆるく振るだけだった。

道原と比呂子は、犬を連れて神社をひとめぐりした。

だが犬にはなんの変化もあらわれない。

「まちがいなく捨て犬だな。首輪のないのがその証拠だ」

「どうしよう?」

「遠くへ連れて行って、捨ててくるか」

「可哀相だよ。こんなに痩せてるんだもの、食べる物がなくて死んじゃうよ」

犬をふたたび車に乗せた。

家に着くと、ロクが二声吠えた。家から出てきた康代は、茶色の大型犬を見ると、悲鳴に似た声を上げた。道原が事情を話した。康代は比呂子をにらんだ。

道原は署に電話し、伏見刑事を呼んだ。比呂子についてきた珍客のことを話した。道原と伏見は、事件捜査のたびにコンビを組む仲だ。伏見の自宅も道原と同じ穂高町。二十七日で独身である。

「ゴールデンレトリバーの成犬……。それは捨てられたんでしょうね。おやじさんのところでは飼うつもりはないんですね?」

伏見は、いつのころからか道原を、「おやじさん」と呼ぶようになっていた。

「君も知っているように、うちにはロクがいる。一匹で精一杯だ」

「拾得物と同じですから、交番に話してみてもいいですか」

「拾得物か……」

道原は受持ち交番に掛け直した。

電話に出たのは井出巡査部長だった。井出は一年あまり前まで上高地交番に勤務していた、道原とは顔なじみである。

井出は十数分後に自転車でやってきた。

「この犬ですか」

彼はしゃがんで、道原家の汚れた珍客をしげしげと見つめた。

彼の話だと、一週間、預かり所で保護し、その間、有線放送で迷い犬のいることを呼びかける。その期間内に飼い主が現われなかった場合は、保健所へ引き渡すのだという。

「保健所ではどうするんだね？」

「処分するんです」

「処分というと、殺すということか？」

「はい」

「それも可哀相だね」

「ええ、まあ。……いい犬ですから、お宅であずかられたらどうですか。六か月間は落とし物扱いで、飼い主が現われた場合、すみやかに返す、ということにしたら」

「うちでは無理だ。あの犬がいるんだから」

道原はロクを指差した。

ロクは修理が終っていない小屋から首だけ出し、珍客の始末をじっと窺<sup>うかが</sup>っている。

「では、こうなさったらどうでしょう」

井出はタバコをくわえた。「お宅で一週間あずかる。その間に町の有線放送で呼びかけをしてもらう」

「一週間経ったら、保健所行きか……」

「いえ。預り所にまかせるんです」

「その間に飼い主が現われなかったら……」

道原は腕を組んだ。

康代が、お茶が入ったと井出に声をかけた。

井出は携帯用の吸殻入れにタバコを押し込んだ。

「一週間か……」

道原は康代に顔を振り向けた。

「比呂子さんは、犬が好きでしたね？」

井出は、玄関の上がり口に正座している比呂子にいった。

「はい」

比呂子はほほ笑んだ。

井出は、署に協力を求めてチラシをつくるし、交番に貼り紙を出すといいった。

「そうしてもらうか」

道原は康代に同意を求めた。

「一週間なら……」

康代はしぶしぶ承知した。

比呂子は手を叩くと外へ出ていった。

珍客はどこへも行こうとせず、比呂子に尾を振った。

「あんだ、ラッキーだったね」

比呂子は珍客を、「ラッキー」と呼ぶことにした。彼女はシャンプーさせるといって、ラッキーを風呂場へ連れていった。風呂場からはしばらく、比呂子の奇声がきこえていた。

## 2

翌朝、道原が出勤すると、伏見が犬のことをきいた。道原はラッキーを一週間、自宅で保護することにしたと話した。

井出の計いで、署では迷い犬のチラシをつくり、交通課の女性警官がそれを配った。

午後二時。道原が遅い昼食を摂っていると、康代から電話があった。彼女が署に電話をよこすのは珍しい。

「有線放送の反響が早速ありましたよ」

「ほう」

「犬を見たいという方が二人、町役場に問い合わせしてきたそうです」

「そうか。じゃ、もらい手がつきそうだな」

「犬種のせいでしょうね」

「いま、人気のある犬だからな」

道原はきょうも定時に帰ることができた。

ロクが小屋から飛び出て前足を上げた。ラッキーは毛のふさふさした尾を振った。ラッキーは誰だれを見てもまったく吠えない、と康代がいった。

比呂子は、下校するとすぐに、ロクとラッキーを散歩に連れていったという。

「きょうは、ラッキーを見にきた方がいました。消防署にお勤めの方の奥さんと娘さん。ラッキーを写真に撮って帰りました」

家族で写真を見て話し合いをするのだろう。

比呂子は、いつになく口数が少ない。ラッキーが早くもらわれていくのが寂しいらしい。康代が、生きものを飼いたくないというのはこのことなのだ。一日でも飼えば情が移る。

彼女は犬や猫がきらいではないのだ。

次の日、ラッキーの嫁入り先が決まった。穂高町内の農家の主婦が見に来て、ぜひ飼いたいといったのだという。

康代は、昨日、見にきた消防署員の妻に電話し、ほかに飼いたいという人がいるがどうするかを打診した。するとその妻は、「からだの弱そうな犬だから辞退したい」と答えた